世界の軽金属学会へ

Internationalization of JILM

金子 純一*

Junichi KANEKO*

何とも大風呂敷を広げたような題名でせん越ですが、当軽金属学会の国際化に関して本欄を借りて一言述べさせていただきます。

本学会は、その規模において近年ほぼ成熟に達した感がある。会員数をはじめ、春秋の大会における講演件数や参加者、学会誌の論文投稿数や年間ページ数などもここ数年あまり増加はしていないように思える。これを打破して今後の飛躍を図るにはどうすればよいだろうか。それには、国際化を図ることにより学会の裾野を広げることが肝要であると考えられる。

当軽金属学会は世界的にも極めてユニークな学会で、その活動を通じて、とくに軽金属に係わる工業技術の一次情報の提供機関としてすでに世界的にも重要な地位を占めているものと思われる。例えば、西独の専門商業誌である *Aluminium* 誌がここ数年の間「軽金属」に掲載された研究論文の英文要約を掲載している。たまたま「軽金属」がほとんど日本語で書かれていることもあろうが、このような世界的な商業誌が二番煎じを掲載する価値を認めるほど「軽金属」の提供する情報の価値が高いということがいえよう。*Aluminium* 誌は、「軽金属」の論文の英文要約についてもその著者に原稿料を支払っていると聞いている。

それから、*World Aluminum Abstract* をみると「軽金属」の論文のいくつかが英文に全訳されて、欧米で印刷物として出回っているのに気付く。誰が翻訳し、どのような機関で発行して、どのようなルートで出回っているのか私は知らないが、「軽金属」誌を読みたいという要望は世界的なものであることは疑いない。前年度の学会活動報告によると、「軽金属」の海外発送部数は105部となっている。韓国27部、米国24部などが主で、他の国はすべて10部以下に過ぎない。

したがって、「軽金属」から情報をキャッチしたいという要望は世界的に強いが、現在の「軽金属」では言葉の障壁もあるため、そのままでは有効な情報として世界では通用しない。「軽金属」は情報源としては世界的に十分活用されるに至っていないことになる。これは学会誌本来の機能を世界的には果たしていないことを意味していよう。もっと「軽金属」に掲載された研究成果を海外にも広く紹介することにより、わが国の軽金属関連の工業技術の発展の実態を広く認識して貰うことも本学会の責務ではないだろうか。

われわれは、また、学会活動を通じて世界の最先端の生の情報に接することも期待している。このような意味においては、当学会では日本人同士の情報交換の場に終わっており、諸外国の先端情報は二次

* 日本大学生産工学部 教授

受理日：昭和63年12月26日

表 1 我が国の主な金属関連学協会国際活動の状況

学協会名	欧文誌発行	欧文年次報告等の発行	国際交流委員会の設置	外国人名誉会員	国際会議の開催	大会での外国人講演
日本金属学会	○	×	○	○	○	定例化
鉄鋼協会	○	×	○	○	○	定例化
日本材料学会	×	○	×	○	○	○
日本鋳物協会	○	×	×	○	○	○
溶接学会	○	×	○	○	○	○
日本塑性加工学会	×	○	×	○	○	○
軽金属学会	×	×	×	×	×	○

的な情報として与えられるだけである。したがって、世界の先端情報に接するためには、われわれは直接海外の学会や国際会議などに出掛けることが必要になるが、そう度々は出掛けることは当然無理なので、通常は間接的な二次的な情報に頼らざるを得ない。

軽金属学会において、もっと多くの諸外国の研究者や技術者が講演したり、解説や論文を書いたり、さらには軽金属関連の国際会議を主催したりすることができないものであろうか。また、春秋の大会での特別講演、地区センターでの講演、シンポジウムやセミナーなどにおいて、海外の研究者や技術者が当学会の諸活動にも関与するようにできないものだろうか。そのためには、学会としての日頃の国際化のための活動を積み重ねることが必要であろう。それにはやはり経済的な裏付けのある招へいを制度化するなどの方策が考えられよう。われわれ研究者は諸外国に出掛けることが多い割りには、諸外国から研究者を受け入れることが少ないのが日本の現状と思われる。海外の研究者の招へいを活発に行うことが当学会の国際化の促進に不可欠であると思われる。それも一度に大勢よりも毎年少しずつ招へいするほうが望ましい結果をもたらすであろう。

私もその一員である当学会の企画委員会では、かつて他学会の国際活動の実情を調査したことがある。その結果に基づき、金属関連の他学会の最近の国際活動状況を比較したのが表1である。国際活動という面で当学会が他学会に遅れをとっていることがこの表からも理解できよう。日頃から地味で着実な国際活動を積み重ねられる体制を早急に整えることが必要と考える次第である。各々の会員はこれまでも国際活動を実践しているのに違いないが、要はそれを学会としての組織的な活動に移せばよいのである。

鉄鋼協会の欧文誌 Trans. ISIJ は1989年1月からその誌名を ISIJ International と変えて国際誌に生まれ変わろうとしている。もちろん誌名だけではなく、各国の研究者からなる International Advisory Board を設置して、諸外国からの論文投稿の勧誘や解説記事の依頼などに当たるそうで、名実ともに国際学術誌にふさわしいものへと企画しているそうである。金属学会の欧文誌も1989年から誌名を Materials Trans., JIM と変えて一層の拡充を図ろうとしている。鉄鋼に次ぐ金属であるアルミニウムの工業技術を支える軽金属学会もそろそろ国際化活動を活発に行って、その裾野を世界中に広げ、世界の軽金属学会といえるように早くしたいものである。